尙に與へて喫せしめよ」と、ソコデ臨濟が、侍者ヤイ、和尙が眠りたいさうな、茶でも進ぜしやつしやれゝ云ふた。スルト又た「嚴、乃ち維那を喚ぶ。第三位に這の上座を安排せよと」、華嚴が、コレ〳〵維那、此の上座はめつたな處には置かれまい、第三位に排列して置くが好いと云ふた。第三位と云ふのは、「校定清規」に、一位は前堂、二位は西堂、三位は後堂、四位は立僧とある。ぢやから臨濟を後堂に置けと云ふのぢや。是りや鋒鋩、手を破らず、勝れた活商量ぢや。

〔宛爾〕〔宛爾〕依前と云ふこと。〔也褒也貶〕褒めたり、くさしたりと云ふこと。

第十五則

到翠峰峰問甚處來師云黃檗來峰云黃檗有何言句指示於人師云黃檗無言句峰云爲什麼無師云設有亦無擧處峰云但擧看師云一箭過西天

【和訓】翠峰に到る。峰問ふ。甚れの處よりか來る。師云く、黃檗より來る。峰云く、黃檗、何んの言句有つてか人を指示する。師云く、黃檗に言句無し。峰云く、什麼と爲てか無き。師云く、設ひ有るも、也た擧する處無し。峰云く、但だ擧せよ、看ん。師云く、一箭、西天を過ぐ。

【提唱】是れは第十五則ぢや。「翠峰に到る。峰問ふ、甚れの處よりか來る。師云く、黃檗より來る」と、此の翠峰と云ふも師承が詳かでない。「峰云く、黃檗、何んの言句有つてか人を指示する」と、黃檗はどんなことを云つて人を指示するかと。此の問話、言中に擧有りぢや。「師云く、黃檗に言句無し。峰云く、什麼と爲てか無き」と、フン黃檗は朝から晩まで一言も云はぬ、生れてから死ぬまで飯一粒も喰はぬと臨濟が云ふと、翠峰が、そりや怪しからぬ、今ま諸方此の通り商量を好むに黃檗は什麼として云はぬぞ。「師云く、設ひ有るも、也た擧する處無し」と、設ひ有れどもサ、向上ぢやから聞く者はあつても、耳を穿つて聞き難からう。聾や盲目の內へ來て聞かせるやうな言句ぢやないわいと。「峰云く、但だ擧せよ、看ん。師云く、一箭、西天を過ぐ」と、翠峰が、さうか知らねど一寸云ふてみよと。臨濟が、「一箭、西天を過ぐ」と、此りや是れ沒蹤跡ぢや。

〔一箭過西天〕方語にて、落處を知らずと云ふこと。

第十六則

到二象田一師問不レ凡不レ聖請師速道田云老僧祇與麼師便喝云許多禿子在二這裏一覓二什麼椀一

【和訓】象田に到る。師問ふ、凡にあらず聖にあらず、請ふ師、速に道へ。田云く、老僧祇だ與麼。師、便ち喝して云く、許多の禿子、這裏に在つて什麼の椀をか覓めん。

【提唱】是れは第十六則ぢや。「象田に到る。師問ふ、凡にあらず聖にあらず、請ふ師、速に道へ」と、此の象田も嗣承が詳かでない。サー象田の處に行つて臨済が問ふのに、染淨雙忘し、凡聖路絶する底作麼生と。「田云く、老僧祇だ與麼」と、是りや面白くない。象田が意は、迷も悟りも不是ぢや、只だ此の通りと。實にハヤ、散々な答話ぢや。「師、便ち喝して云く、許多の禿子、這裏に在つて什麼の椀をか覓めん」と、ソコデ臨済、大喝してサ、大衆の方を睨め付けて、エー此の喰ひ物ばかり探して歩く馬鹿者め、こんな處に居つて、何んの埒の明いたことがある、何をしやうと思ふのかと。南天棒云く、此の臨済の所問の下では、一喝して好いぞ。それをサ、「老僧祇だ與麼」と計りではぬるッこいッぢやから臨済が是くの如く云ふたのぢや。

【注釈】〔什麼椀〕椀とは閑家具を指す。

第十七則

到二明化一化問來來去去作二什麼一師云祇徒蹈破草鞋化云畢竟作麼生

【和訓】明化に到る。化問ふ、來來去去して什麼をか作す。師云く、祇だ徒に草鞋を蹈破す。化云く、畢竟作麼生。師云く、老漢話頭も也た識らず。

【提唱】是れは第十七則ぢや。「明化に到る。化問ふ、來來去去して什麼をか作す。師云く、祇だ徒

に草鞋を蹈破す」と、此の明化も嗣承不明ぢや。明化が臨濟を見て、彼處此處をうろつき廻つて、何をしてをるのかと。卽ち臨濟の脚跟を看んと要したぢや。ソコデ臨濟が、只だ草鞋を踏み破るばかりぢや、何んの求むることもないと。是りや直示ぢや。「化云く、畢竟作麼生」と、それはそれで好いが、落著の處は如何ぢやと。「師云く、老漢話頭も也た識らず」と、エー此の老漢、言云ふ術も知らぬ和郎ぢやと。南天棒云く、徒に去來すと云ふに、何んの畢竟取るべきとか有らんやぢや。併し是れは賓主互換の好商量ぢや。

主客　無し。

第十八則

往鳳林路逢一婆婆問甚處去師云鳳林去婆云恰値鳳林不在師云甚處去婆便行師乃喚婆婆回頭師便打

【和訓】鳳林に往く路に一婆に逢ふ。婆問ふ、甚れの處にか去る。師云く、鳳林に去る。婆云く、恰かも鳳林の在らざるに値ふ。師云く、甚れの處にか去る。婆便ち行く。師乃ち婆を喚ぶ。婆、頭を回す。師便ち打す。

【提唱】是れは第十八則ぢや。「鳳林に往く路に一婆に逢ふ。婆問ふ、其れの處にか去る。師云く、鳳林に去る」と、此の頃は禪學が盛んであつて、婆子に至るまで油斷がならぬ、是くの如く嶮峻なのがある、明眼の衲僧も鼻を突くぢや。臨濟が鳳林行をやつた時、路で婆々に逢つた。スルト婆々が、お坊は何處へ行かれると問ふので、臨濟は、鳳林に行くのぢやと云ふた。「婆云く、恰かも鳳林の在らざるに値ふ」と、ハア鳳林は今日はお留守ぢや、丁度の時御座つたのうと。サー何故斯う云ふたナ。「師云く、甚れの處にか去る。婆便ち行く。師乃ち婆を喚ぶ。婆、頭を回す。師便ち打す」と、臨濟が、さうか、鳳林は何處に行せたぞと。是りや陷虎の機ぢや。スルト婆々めが、づない尻を振つて跡から御座れ〳〵とサ。女の悟つたのはすさまじいものぢや。己めがこゝをやらうとの仕事ぢやナ。ソコデ臨濟が、ヤイ婆々待てと喚んだ。婆々が一寸と向き返つた。けれども箭、新羅を過ぐぢや。是りや婆々をだましたのぢや。南天棒云く、機を見て作す、妨げず恰悧なることを。此の「打」の字は、「四家錄」には「行」となつてをる。「行く」の方が好い。

【主意】〔四家録〕臨済、雲門、仰、法眼の四家の記録なり。○異本には、「師云ふ、誰れか道ふ不在と。婆便ち門を閉却す」に作る。空東山の録に云く、「予、政和の初め、嘗つて石鞏新公より、馬祖四家録を得たり。其の後に臨済と婆子との問答を載す。婆、済に問ふ、甚れの處にか去る。済云く、鳳林に去る。婆云く、恰かも鳳林の在らざるに値ふ。済云く、甚れの處にか去る。婆便ち行く。済、婆を召す。婆、首を回す。済便ち行く」と。

第十九則

到鳳林。林問、有事相借問得麼。師云、何得剜肉作瘡。林云、海月澄無影遊魚獨自迷。師云、海月既無影遊魚何得迷。鳳林云、觀風知浪起、翫水野帆飄。師云、孤輪獨照江山靜、自笑一聲天地驚。林云、任將三寸輝天地、一句臨機試道看。師云、路逢劍客須呈劍、不是詩人莫獻詩。鳳林便休。師乃有頌、大道絶同任向西東。石火莫及、電光罔通。「從上諸聖將什麼爲人。」仰山云、和尚意作麼生。潙山云、但有言說都無實義。仰山云、不然。潙山云、子又作麼生。仰山云、官不容針私通車馬。

【和訓】鳳林に到る。林問ふ、事有り、相ひ借問し得てん麼。師云く、何んぞ肉を剜つて瘡と作すことを得たる。林云く、海月澄んで影無く、遊魚獨り自ら迷ふ。師云く、海月既に影無ければ、遊魚何んぞ迷ふことを得ん。鳳林云く、風を觀て浪の起るを知り、水を翫んで野帆飄る。師云く、孤輪獨照して江山靜かに、自笑一聲天地驚く。林云く、任ひ三寸を將つて天地を輝かすも、一句、機に臨んで試に道へ、看ん。師云く、路に劍客に逢はば須らく劍を呈すべし、是れ詩人にあらずんば詩を獻ずること莫れ。鳳林便ち休す。師乃ち頌有り、大道、同を絶して、西東に向ふに任す。石火も及ぶこと莫く、電光も通ずること罔し。從上、仰山に問ふ、石火も及ぶこと莫く、電光も通ずること罔くんば、從上の諸聖、什麼を將つてか人の爲めにせん。仰山云く、和尚の意作麼生。潙山云く、但だ言說のみ有つて、都べて實義無し。仰山云く、然らず。潙山云く、子又た作麼生。仰山云く、官には針をも容れず、私に車馬をも通ず。

【提唱】是れは第十九則ぢや。「鳳林に到る。林問ふ、事有り、相ひ借問し得てん麼」と、此の鳳林と云ふも嗣承が未詳ぢや。鳳林が臨済に向つて、借問し得てんやと。是りや汾陽の十八問の中の借事問ぢや。師云く、何んぞ肉を剜つて瘡と作すことを得たる」と、眼々相ひ對した上こそ左様ぢやに頻りに問ひ廻る。ハテサテいらざることぢや。元來明白なものを、纔かに問へば第二第三、毛を吹いて瘡を求むぢや。佛見法見を起せば、ソラ瘡だらけぢやぞ。「林云く、海月澄んで影無く、遊魚獨

り自ら迷ふ」と、鳳林が、自ら胸中無一物に比してサ、問ふも問はるゝこともないに、うろたへ者め、何方が天か、何方が月か知らぬ。ソレそこに小鰯がうろたへる。實にハヤ、法性海中に住み堪へぬうろたへ者ぢやと。己は法性海、生死海、煩惱海、菩薩海に大自在を得たから、お身達の及ぶことではないと云はれたのぢや。卽ち臨濟を試んとしたぢや。遊魚とは臨濟を指す。「師云く、海月既に影無ければ、遊魚何んぞ迷ふことを得ん」と、エーそなたの海に影があるに依つて遊魚が迷ふぢや。サー澄んだなぞと云へば濁りがある、臨濟見遁しはせぬぞと。是りや蓋覆却ぢや、又た賊鎗を把つて賊を刺すぢや。「鳳林云く、風を觀て浪の起るを知り、水を翫んで野帆飄る」と、エヘン、法性海中、涅槃海中を自在に乘り渡る千石船のことは、とても小魚の分際として知ることはならぬ。風を見れば浪の起ると云ふことを知る、そなたの迷ひは見透したぞと。是りや海印三昧、是れ他の境界にあらずぢや。「師云く、孤輪獨照して江山靜かに、自笑一聲天地驚く」と、ヘン何に〳〵、それはさうでもあらうが、臨濟が處にも一家風はある。此の高い處から見下せば、前の濱に小舟一艘浮いたやうな。エー自慢らしく、可笑しくてならぬ。イヤハヤ衲が一笑ひしたら、世界が動ぎさうなと。大きな笑ひぢやナ。サー衲僧門下にも好風光があるが餘人は知らぬ。字面で云ふたら、寒月昏塵を鎭むと云ふ趣きがあるぞ。是りや臨濟の自負ぢや。「林云く、任ひ三寸を將つて天地を輝かすも、一句、機に臨んで試に道へ、看ん」と、汝め、なんぼ三寸の舌を以つて口をきいても、まさかの時は、尾をすぼめて逃げるであらうがナ。サーどうぢや、當機覿面の一句を云ふてみよと掛つた。「師云く、路に劍客に逢はば須らく劍を呈すべし、是れ詩人にあらずんば詩を獻ずること莫れ」と、云へと云ふなら、云はまいものでもないけれども、向上の人でなければ云はれぬ。知音でなくてはめつたなことは云はんぞと。此の一偈は實に宗門の龜鑑ぢや。臨濟の如き働きはサ、思慮分別盡き切つて、是のやうなる自在は、無功用の處から出るぞ。「鳳林便ち休す」と、此奴、總身に口の付いた奴ぢや、相手になるは損ぢや。いざ〳〵小僧、腰でも叩けと。借事問了也ぢや。「師乃ち頌有り。大道、同を絕して、西東に向ふに任す。石火も及ぶこと莫く、電光も通ずること罔し」と、大道と云ふものは、十二時中、了々分明にさへあれば、四威儀の上に於て使ひ得てをれども、外から窺ひ見ることはならぬ。此の座敷がサ、三世如來の紫磨黃金、比べるものはない、唯だ一ト振りの金剛王寶劍ぢや、三世の如來も屆かぬ。地獄でも餓鬼でも其の上で、東西南北、鐵一團の境界ぢや。サー此の大道、一念生ずると、石火も及ぶとなく、電光も通ずるとがない。心を擬すれば卽ち差ひ、念を動ずれば卽ち乖くぢや。思慮分別ではとゞかぬと。臨濟、ヤレ〳〵諸方尋ねても、此の方の鉾に掛るものはないと云ふ心が、チャンとあるぞ。「潙山、仰山に問ふ、石火も及ぶこと莫く、電光も通ずること罔くんば、從上の諸聖、什麼を將つてか人の爲めにせん」と、是れ又た潙山、仰山の商量ぢや。潙山が仰山に向つて、石火も及ぶことなく、電光も通ずることなくんばサ、從上の諸聖達が

何れも爲人說法せられたは、何事を云つて人の爲めにせられたぞと問ふて、仰山の見解を見んとした。「仰山云く、和尙作麼生。潙山云く、但だ言說のみ有つて、都べて實義無し」と、仰山が、衲よりも和尙、こなたは如何ぢやと。潙山が、我が思ふには、只だあの通りに云ふた迄のことと思ふ。即ち從上の諸聖の爲人せられたは、但だ言說でこそあれ、實法ではない、方便の說ぢやと。是れはサ、云ふたりけりのやうなれども、恐しい荊棘を浴せたものぢや。山も川も、男も女も、只だ云ふたりけりぢや。是りや探竿影艸ぢやぞ。「仰山云く、然らず、潙山云く、子又た作麼生」と、仰山は肯はなかつた。ソコテ潙山が、そんなら汝は如何ぢやと。「仰山云く、官には針をも容れず、私に車馬を通ず」と、サー此の座敷が佛の肝腸、十方法界の全體ぢや。往來を絕した表向では、石火も及ぶことなく、電光も通ずることなしぢやが、手前では自由に働くぢやと。是れ合頭の語のやうなれども、玆にサ、潙仰宗の風彩仔細があるぞ。潙山が、石火も及ぶこと莫く、電光も通ずること罔くんばと、鴆酒を一杯浴せたから、仰山も亦た一歩進めた。大道の端的に至つては、石火電光も及ぶとはないけれども、緣起法界に出でては、或時は有と說き、或時は無と說くぢや。

註解〔汾陽の十八問〕問話の種類を十八種に分類したるもの。汾陽善昭禪師の立つる處なるを以つて汾陽の十八問と云ふ。(一)請益問、(二)呈解問、(三)察辨問、(四)投機問、(五)編辟問、(六)心行問、七)探拔問、(八)置問、(九)故問、(十)不會問、(十一)擊蔵問、(十二)借問、又は借事問、十(三)實問、(十四)假問、(十五)默問、(十六)明問、(十七)審問、(十八)徵問。〔蓋覆却〕覆ふが如く、大きく出ること。

第二十則

到金牛牛見師來横按拄杖當門踞坐師以手敲拄杖三下却歸堂中

第一位坐牛下來見乃問夫賓主相見各具威儀上座從何而來太無禮生師云老和尙道什麼牛擬開口師便打牛作倒勢師又打牛云今日不著便潙山問仰山此二尊宿還有勝負也無仰山云勝卽揔勝負卽揔負

【和訓】金牛に到る。牛、師の來るを見て、横に拄杖を按じて、當門に踞坐す。師、手を以つて、拄杖を敲くこと三下して、却つて堂中に歸して、第一位に坐す。牛、下り來つて見て乃ち問ふ、夫れ賓主の相見は、各威儀を具ふ。上座何れ從りして來つて、太だ無禮生なる。師云く、老和尙什麼と道ふぞ。牛、口を開かんと擬す。師便ち打す。牛、倒るる勢を作す。師又た

打す。牛云く、今日便を著けず。潙山、仰山に問ふ、此の二尊宿、還つて勝負有りや也た無や。仰山云く、勝つときは卽ち揔に勝ち、負くるときは卽ち揔に負く。

【提唱】是れは第二十則ぢや。「金牛に到る。牛、師の來るを見て、横に拄杖を按じて、當門に踞坐す」と、金牛は馬祖下ぢや。思ふに馬祖の法嗣どもが、臨濟の時分まで生き殘つてをつたものぢやらう。併しサ、此の金牛は、自ら飯桶を將つて、菩薩子喫飯來と云ふた金牛か、或は其の已後の金牛か、其の邊は未審しいが、兎に角、金牛が臨濟の來るのを見て、拄杖を横にして、猛虎の踞坐するやうに、門の前にチャンと坐つた。卽ち第一關を据えたのぢや。此處で若し臨濟が不力量ならば後退りをする處ぢやがサ、「師、手を以つて、拄杖を敲くこと三下して、却つて堂中に歸して、第一位に坐す」と、ソコデ臨濟、近前して手で拄杖を敲いた。卽ち關を敲く勢ぞ。そして堂中に入つて王位に向つて第一位に、シャンと何に喰はぬ貌で坐した。「牛、下り來つて見て乃ち問ふ、夫れ賓主の相見は、各威儀を具ふ。上座何れ從りして來つて、太だ無禮生なる」と、金牛が來て見て、甚だ無禮千萬ぢやと咎めたがサ、金牛も是れには全く弱り切つた。「師云く、老和尚什麼と道ふぞ」と、是れ官には針をも容れざる端的ぢや。サー眼を著けて看よ。「牛、口を開かんと擬す。師便ち打す」と、金牛が口をもが〳〵すると、臨濟、間、髪を容れず、スバッと打つた。「牛、倒るる勢を作す」と、此の金牛の全體はすさまじいものぢや、此處に玄妙奇體な諦訛があるぞ。「師又た打す。牛云く、今日便を著けず」と、臨濟又た打つた。ソコデ金牛が、今日は散々の首尾ぢやと。併しサ、此處等は見え惡い、猶ほ〳〵きつい仕舞程手強いぞ。「潙山、仰山に問ふ、此の二尊宿、還つて勝負有りや也た無や」と、潙山が又た仰山に向つて、此の二人の商量は、勝負があつたのか如何ぢやと問ふた。「仰山云く、勝つときは卽ち揔に勝ち、負くるときは卽ち揔に負く」と、是れは又たすさまじい語ぢや。仰山、金牛、臨濟は、鼎の三つ足のやうなもので、全く優劣はない。仰山の斯う云ふたは、畢竟勝負はないと云ふことぞ。

【註解】無し。

第二十一則

師臨遷化時據坐云吾滅後不得滅却吾正法眼藏三聖出云爭敢滅

却和尚正法眼藏師云已後有人問爾向他道什麼三聖便喝師云誰知吾正法眼藏向這瞎驢邊滅却言訖端然示寂

【和訓】師、遷化に臨む。時に據坐して云く、吾が滅後、吾が正法眼藏を滅却することを得ざれ。三聖出でて云く、爭でか敢て和尚の正法眼藏を滅却せん。師云く、已後人有つて爾に問はば、他に向つて什麼とか道はん。三聖便ち喝す。師云く、誰れか知る、吾が正法眼藏、這の瞎驢邊に向つて滅却することを。言ひ訖つて端然として示寂す。

【提唱】是れは第二十一則ぢや。「師、遷化に臨む。時に據坐して云く、吾が滅後、吾が正法眼藏を滅却することを得ざれ」と、臨済も愈々遷化に臨んだぢや。遷化に臨んで、是くの如く問答して死ぬる知識はあるまい。皆な是れ兒孫を思ふことの親切な故ぢや。實に有り難い宗門の龜鑑ぞ。鳥の將に死なんとする時其の聲や悲しく、人の將に死なんとする時其の言や善しと。臨済も遷化に臨んで、チャンと商量せられた。遷化と云ふことはサ、此の世界の緣が盡きて、化を他方に遷すの義ぢや、釋迦は死なれたと思ふたが、今でもまめ息災にして、西方では彌陀となり、東方では藥師となる。それぢやから今も西方では說法最中ぞ。サー此の正法を末世まで相續して、必らず滅却するなと。禪學者は能く此處を呑み込まねばいかぬ。臨済は、寺を持てとも、經を讀めとも云はぬ。是れを以て見る時は、無事是れ貴人と云つてゐて濟むものか。人の施した飯を喫し、人の織つた著物を著て、それで濟むものか。篤と此處を合點せよ。「三聖出でて云く、爭でか敢て和尚の正法眼藏を滅却せん」と、三聖は侍者ぢや。その三聖が云ふのに、我等が有りながら、どうして滅却しませうぞと。玆に如何も斯うも云はれぬ、縫罅のない極く微細の按排、深々の旨い處がある。是れが機中に一句を藏すと云ふ處ぞ。此の中の微妙な妙と云ふものは、骨折つて合點すると、含んで持つやうな。「師云く、已後人有つて爾に問はば、他に向つて什麼とか道はん」と、サー臨済が遷化した後に、人が若し爾に問ふことあらば、爾は何んと答へるぞ。「三聖便ち喝す」と、喝ッー。山崩れ地裂く。必らず平生、一喝の會を作す莫れぢや。此の一喝は、實にハヤ臨済正宗を續き得た上のことぞ。「師云く、誰れか知る、吾が正法眼藏、這の瞎驢邊に向つて滅却することを。言ひ訖つて端然として示寂すと、人を殺さば須らく血を見るべしぢや。臨済が三聖を見拔いた此の末後の一句、難有涙が溢れる。兒孫を骨髓に思ふ故ぞ。「這の瞎驢邊」とは、三聖を指したのぢや。是りや臨済、歡喜の餘りに出た言葉ぢや。さぞ嬉しかつたらう。滅却とはサ、一塵一法をも立せざる處ぢや、其處に鋒鋩を露すぞ。サー斯う云ひ終ると、身體を眞直にして色香をも變ぜず、何んのことなしに、ずる〳〵と寂を示されたと。是れまでが三聖慧然の集むる處の語錄ぢや。是より已下は、鎭州保壽の延沼の記す處の略傳ぢや。

頌 此の則を大慧宗杲頌して曰く、「瞎驢一跳衆皆な驚く、正法那んぞ人に付與するに堪へん。三要三玄俱に喪盡して、堂堂として手を擺つて重城を出づ」と、又た白雲守端頌して曰く、「泰山を擘破して雷未だ猛ならず、滄海を照明して月、光に非らず。瞎驢滅却す正法眼、直に得たり哀哉大唐に滿つ」と。

略傳

師諱義玄曹州南華人也俗姓邢氏幼而穎異長以孝聞及落髮受具居於講肆精究毗尼博賾經論俄而歎曰此濟世之醫方也非教外別傳之旨即更衣遊方首參黃檗次謁大愚其機緣語句載于行錄既受黃檗印可尋抵河北鎭州城東南隅臨滹沱河側小院住持其臨濟因地得名時普化先在彼佯狂混衆聖凡莫測師至即佐之師正旺化普化全身脫去乃符仰山小釋迦之懸記也適丁兵革師即棄去太尉默君和於城中捨宅爲寺亦以臨濟爲額迎師居焉後拂衣南邁至河府府主王常侍延以師禮住未幾即來大名府興化寺居干東堂師無疾忽一日攝衣據坐與三聖問答畢寂然而逝時唐咸通八年丁亥孟陬月十日也門人以師全身建塔干大名府西北隅敕謚慧照禪師塔號澄靈合掌稽首記師大略住鎭州保壽嗣法小師　延沼　謹書

鎭州臨濟慧照禪師語錄 終

【和訓】 略傳。師、諱は義玄。曹州南華の人なり。俗姓は邢氏。幼にして穎異なり、長となつて孝を以つて聞ゆ。落髮受具するに及んで、講肆に居り、精しく毘尼を究め、博く經論を賾る。俄にして歎じて曰く、此れ濟世の醫方なり、教外別傳の旨に非らずと云つて、即ち衣を更へて遊方す。首め黃檗に參じ、次に大愚に謁す。其の機緣語句、行錄に載せたり。既に黃檗の印可を受けて、尋いで河北に抵る。鎭州城の東南の隅、滹沱河の側に臨んで、小院に住持す。其れ臨濟は、地に因つて名を得たり。時に普化、先づ彼に在つて、佯狂として衆に混ず、聖凡測ること莫し。師至れば即ち之れを佐く。師、化を旺にするに正つて、普化全身脫去す。乃ち仰山小釋迦の懸記に符へり。遂に兵革に丁つて、師即ち棄て去る。大尉默君和、城中に於て宅を捨てて寺と爲し、亦た臨濟を以つて額と爲して、師を迎へて焉に居らしむ。後ち衣を拂つて南に邁いて河府に至る。府主王常侍、延くに師の禮を以つてす。住ること未だ幾くならざるに、即ち大名府の興化寺に來つて、東堂に居す。師、疾無くして忽ち一日、衣を攝めて

攝坐し、三聖と問答畢つて、寂然として逝す。時に唐の咸通八年丁亥孟陬の月十日なり。門人、師の全身を以つて、塔を大名府の西北の隅に建つ。敕して慧照禪師と謚す、塔を浄靈と號す。合掌稽首して、師の大略を記す。鎭州保壽に住する嗣法の小師　延沼　謹んで書す。

鎭州臨濟慧照禪師語錄終り。

【提唱】是れから略傳ぢや。「師、諱は義玄。曹州南華の人なり。俗姓は邢氏。幼にして穎異なり」と、臨濟は幼より穎拔、奇異な人であつた。信實、心信、諸人に抽んでゝ、生れ付き大丈夫の氣を具してをるものは、隱せども自然と顯れるぢや。稻穗の秀るがやうにサ。「長となつて孝を以つて聞ゆ」と、至つて孝行な人ぢやつた。孝は至道の法ぢや。僧侶、在俗共に此の行ひがなければ、犬猫も同じとぢや。臨濟は鬼の樣な面でゐながら、能く父母に事へた。「落髮受具するに及んで、講肆に居り、精しく毗尼を究め、博く經論を賾る」と、それから落髮受具して出家せられたがサ、正法の出家と云ふは、心を剃ると云ふことぞ。「維摩經」の弟子品に、正法の出家せよとある。歌に、「そりたきは心の中の亂れ髮、あたまの髮は兎にも角にも」と。ぢやから髮を剃るとは、煩惱妄想を剃り放せと云ふ表相ぢや。出家兒は此の歌の意を忘れぬが好いぞ。又た受具とは、二百五十の具足戒を受けるを云ふ。沙門は年二十にして具足戒を受けるぢや、即ち阿毘曇ぢや。扨て臨濟は、出家後は講肆に居つた。是れは學校とも、學肆とも云ふ。つまり學文の市藏から出した處ぢや。其處で精進して戒律を究め經相を探つた。出家は身を正しくしてこそ出家ぢや。「俄にして歎じて曰く、此れ濟世の醫方なり、敎外別傳の旨に非らずと云つて、即ち衣を更へて遊方す」と、臨濟、歎じて云ふのに、是りや是れ醫者の手間取りと同じぢやないか、つまらんことぢや。敎の方ばかり學者でゐては役に立たぬ、何んでも自己を證得せねばと。とう〳〵禪家の衣を著て、諸方へ遍參と出掛けた。「首め黃檗に參じ、次に大愚に謁す。其の機緣語句、行錄に載せたり」と、來機に應じた因緣や、一語半句のことは、是れ皆な行錄に示してある。「既に黃檗の印可を受けて、尋いで河北に抵る。鎭州城の東南の隅、滹沱河の側に臨んで、小院に住持す」と、是れは是れ迄に度々云ふて來た字面の通りぢや、別に講釋はいらぬ。住持とは住職で、留守番坊主ではない。「其れ臨濟は、地に因つて名を得たり」と、臨濟とは渡し場ぢや。生死涅槃の間に迷ふてをるを、般若波羅密多の舟に乘せて、涅槃の岸に渡す。所謂地に因つて名を得たのぢや。「時に普化、先づ彼に在つて、佯狂として衆に混ず」と、普化は先ッから鎭州に在つて、氣違となつて大衆に交つて居つたが、只の氣違ぢやない。いくら飛んでも跳ねても、大道が動がぬからサ。僧とも俗とも知れぬ底の物狂ひぢや。「佯狂」の二字は「史記」の世家に見えてをる。「聖凡測ること莫し。師至れば即ち之れを佐く。師、化を旺にするに正つて、普化全身脫去す」と、是れは勘辨の處で講じたから見るが好い。「乃ち仰山小釋迦の懸記に符へり」と、仰山が示した未來記に符合してをる。小釋迦とは仰山のことぢや。「適兵革に丁つて、師即

ち棄て去る」と、適戰爭がおッ初つたので、臨濟は院を棄てゝ去つた。「大尉默君和、城中に於て宅を捨てて寺と爲し、亦た臨濟を以つて額と爲して、師を迎へて焉に居らしむ」と、大尉と云ふは、支那では三公の一人ぢや。日本で云へば太政大官に當る。此の事は臨濟の碑銘に刻してある。「後ち衣を拂つて南に邁いて河府に至る。府主王常侍、延くに師の禮を以つてす。住ること未だ幾くならざるに、卽ち大名府の興化寺に來つて、東堂に居す」と、是れも讀の通りぢや。河府と云ふのは河南府のことぢや。又た東堂とは隱居の義ぢや。卽ち大名府の興化寺に隱居したと云ふまでぢや。「師、疾無くして忽ち一日、衣を攝めて據坐し、三聖と問答畢つて、寂然として逝す。時に唐の咸通八年丁亥孟陬の月十日なり」と、臨濟も結構な往生ぢや。疾も何んにもなくサ、或日衣を攝め威儀を正して、前にも云ふた三聖と正法眼藏の問答を畢ると、寂然として逝すとサ。所謂正念工夫、相續不斷、全く坐禪の勳功ぢや。一老宿有り、因に僧問ふ、古の聖人は死する時微笑す。今の人多くは苦痛すと。答へて云く、古人は念々心、定慧に在り。今人は念々心、散亂に在りと。是れは各自氣を付くべきことぢや。其の遷化の時は、唐の咸通八年正月十日であつた。卽ち日本の人皇五十六代淸和天皇の貞觀九年に當る。併し此の年代に就いても種々の說がある。「人天眼目」には八年とあり、「會元」には八月とあり、「佛祖統記」には七年とあり、「傳燈」、「祖庭事苑」等には、七年正月十日とある。何れにしても師の遷化は、正月十日と云ふ日は動かすべからざるものぢや。「門人、師の全身を以て、塔を大名府の西北の隅に建つ」と、僧俗の門人等が、大名府の西北隅に全身を收めて塔を建てたと、「敕して慧照禪師と諡す」と、懿宗皇帝が臨濟の道風を慕ふて、詔を下して慧照禪師と諡された。慧照とは、餘り智慧ある人の故にかサ。「塔を澄靈と號す」と、塔の名は澄靈と云ふた。「合掌稽首して師の大略を記す、鎭州保壽に住する嗣法の小師、延沼、謹んで書す」と、合掌九拜して、臨濟禪師の一生受用の百分の一を記しました。鎭州保壽の延沼が謹んで書きましたと。サー此の延沼と云ふにも異說がある。臨濟の嗣法は寶壽延沼ぢや、保壽風穴延沼は臨濟四世の孫ぢや。寶と保と同音なるが爲めに誤つたのぢやから、茲では臨濟の嗣法、寶壽沼と見よと云ふ說があるが、是れは疑はしい。此の緣起は、必らずしも風穴延沼が書いたものでないとは云へぬ。嗣法とは傳法と云ふ心ぢやから、臨濟の嗣法とのみは限らぬ。且つ又た諸錄にも保壽とあつて寶壽とはない以上、强ち他の字に改めることもなからう。

是れで「臨濟錄」全體の提唱を終つた。終りに臨んで、サー講了の偈を唱へやう。

活捉臨濟白拈賊　滿囊臟物有誰傳
父羊子證正如無　料棟主賓不價錢

注釋〔曹州南華〕南華は曹州の縣名なり。〔阿毘曇〕論部の總名なり。阿毘曇とは舊名にして、大法、無比法と譯す。新名にては阿毘達磨と云ふ、譯して對法（智慧の別名）と云ふ。〔佯狂〕「史記」の宋の世家に、「箕子、髪を被つて佯狂す」とあり。〔小釋迦〕「會元」の九卷、仰山章に曰く、「梵僧有り、空より來る。師曰く、近離甚れの處ぞ。（梵僧）曰く、西天。師曰く、幾く時にか彼を離る。曰く、今早。師曰く、何んぞ太遲生なる。曰く、遊山翫水す。師曰く、神通遊戯は則ち闇黎に無きにらず、佛法は須らく老僧にして初めて得べし。曰く、特に東土に來つて文殊を禮せんとし、却つて小釋迦に遇ふと。遂に梵書の貝葉を出して師に與へ、作禮して空に乘つて去る。此れより小釋迦と號す」と。〔兵革〕革は甲、兵革とは亂世なり。五百人を旅ゝなし、一萬二千五百を軍となす。〔默君和〕碑銘には「墨君和」に作る。〔敕諡〕「事物起原」の卷七に、「後魏の太和の時、法果卒す。諡胡靈と諡す。此れ僧に諡を賜ふの始なり」と。

提唱臨濟錄 終

提唱臨濟錄
定價參圓八拾錢

大正九年十月十五日印刷
大正九年十月廿五日發行

著者　中原鄧州
校正者　平松亮卿

東京市日本橋區數寄屋町一番地
發行者　濱井松之助

東京市京橋區西紺屋町二十七番地
印刷者　石川金太郎

東京市日本橋區數寄屋町一番地
發兌　大阪屋號書店
振替東京一三七五番
電話本局四二八九番
電話本局三七三七番

秀英舍印刷

不許複製

IH5F42

南天棒　中原鄧州老師著

天覽

提唱碧巖集

上卷六百二十頁　金四圓五拾錢
中卷七百八十頁　金五　圓
下　卷　金五圓五拾錢
送料各册　金廿壹錢

本書は老師の言々句々全紙面に躍動し面のあたり其提唱を聽き其風丰に接するの感あり、一讀覺えず案を拍て悟道の大歡喜を叫ばしめん、特に本書の跨示すべきは古來難事として試みられざりし本文中の評唱をも垂示、本則、頌、着語と同樣全文に亘て一々丁寧に讀方註釋をも施されたるにあり

南天棒　中原鄧州老師著

三版

一喝禪

四六判總布函入
定價　壹圓參拾錢
郵送料　金十二錢

道ひ得しも南天棒、道ひ得ざるも南天棒、これ老師が平生不盡底の活作略なり、其棒を行じ喝を下し惡辣の禪機を弄するや、宗匠學人の命根を勵絶せしむ、今や禪風地に落つるを憤慨し血滴々の菩提心を吐却し『暗愚却悟、大悟却迷』を喝破せらる。

發兌　東京振替　日本橋　寄屋町　東京日本橋　數寄屋町　大阪屋號　電話局　三四七二番　三八七九番

終